

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：34407

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520112

研究課題名(和文) 帝国論の新展開と情動論的転回

研究課題名(英文) New Developments in Empire Theory and the Affective Turn

研究代表者

水嶋 一憲 (Mizushima, Kazunori)

大阪産業大学・経済学部・教授

研究者番号：20319578

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、A・ネグリとM・ハートによる帝国論の新展開と人文・社会諸科学における情動論的転回が共有する意義と射程を明らかにしつつ、今日のグローバル資本主義の中で情動が果たす極めて重要な働きを分析した。特にネグリとハートの『コモンウェルス』を翻訳するとともに、メディア理論の最新の成果も取り入れつつ、(1) 帝国の情動諸装置のメカニズム、(2) グローバルな制御社会における情動の流通と調整、(3) ソーシャル・メディアによる情動の捕獲等について、研究を進めることができた。これらの研究成果は、今日のグローバル化したネットワーク社会の中で情動の諸相を探究するためのプラットフォームを提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the new developments in "Empire" theory led mainly by M. Hardt & A. Negri and "the affective turn" undergone recently in the humanities and social sciences. From such a perspective, we elucidated the common significance and scope of these two movements, and examined the very important role of affects playing in the contemporary global capitalism. Particularly through this whole project, we translated Hardt & Negri's "Commonwealth" and "Declaration", and also by adopting the latest results of media theory, we could have advanced further the meaningful studies of such topics as (1) the mechanism of Affective Imperial Apparatuses (AIAs), (2) the circulation and modulation of affects in the global society of control, and (3) the capture of affects by social media and communicative capitalism. We believe that these results will serve as a platform of co-research for investigating the various aspects of affects in today's globalized network society.

研究分野：思想史・メディア文化研究

 キーワード： 帝国 情動 共 (コモン) グローバル化 制御(コントロール)社会 ソーシャル・メディア
 ネットワーク社会 コミュニケーション資本主義

1. 研究開始当初の背景

2000年に刊行され、世界中で大きな注目を集めた『帝国』で、著者のネグリとハートは、現在形成されつつあるネットワーク状のグローバル秩序のことを「帝国」と名づけた。しかも、このような「帝国」的権力は、いまや地球全体を覆い尽くしつつあるばかりか、人びとの生の奥深くにまで浸透しつつあり、その意味でこれはグローバルな生権力とも呼ぶことができる。さらに、グローバルな生権力としての「帝国」的権力は、諸個人を規律化することよりも、前個体的な身体能力としての諸情動を調整し、制御することにその力点を置いている。

ネグリとハートのこうした分析は、近年の人文・社会諸科学における情動論的転回の流れに呼応したものである。スピノザを淵源とする情動論的転回において、情動とは、触発し・触発される身体能力のことを指す。情動論的転回は、そのような情動の諸相に照準することをおして、従来の批判理論や権力理論のパラダイム転換、またひいては21世紀のグローバル社会における身体・テクノロジー・モノの新たな布置の解明を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今日のグローバル資本主義の新たな展開のなかで情動が果たす大きな役割、いいかえれば、情動のポリティクスとエコノミーに対して、(a)ネグリとハートの「帝国」三部作を中心とする帝国論の新展開、(b)近年の人文・社会諸科学における情動論的転回という交差する視座から接近を試みることにある。

この目的を達成するために、(1)ネグリとハートの「帝国」三部作の最終巻にあたる『コモンウェルス』とその続編『叛逆』の翻訳作業を進めながら、(2)グローバルな制御社会としての「帝国」における情動の流通と調整や、「国家のイデオロギー諸装

置」(ルイ・アルチュセール)から「帝国」の情動諸装置への転換について思想史的に考察するとともに、(3)ソーシャル・メディアの隆盛に見られるような、今日支配的な生産形態である「コミュニケーション資本主義」(ジョディ・ディーン)における情動の捕獲の仕組みを「ネットワーク文化の政治経済学」という視点から分析する。

3. 研究の方法

(1)帝国論の新展開と情動論的転回の両方にとっての基本文献にあたる、ネグリとハートの著書を翻訳することを通じて、この新たな研究分野における学際的議論の展開と発展のための基礎的な土台を構築する。また、欧米圏を中軸に形成されている理論的フロンティアを積極的に紹介・導入するように努める。

(2)アメリカのハーヴァード大学やイタリアのカ・フォスカリ大学をセンターとする海外の研究者との交流を通じて、文化研究の最先端とも響き合う、国際的な研究協力体制を立ち上げる。

(3)ドイツの Transmediale/festival を一つの中心的な節点とするメディア研究者の国際的なネットワークを通じて、ソーシャル・メディアの時代における「共通」とコミュニケーションのあり方や、情動の流通・制御・捕獲のメカニズム等の問題構制について、学際的な視点からその解析に取り組む。

4. 研究成果

以下、本研究課題が採択された4年間について、各年度に分けて記述する。

(1)まず初年度(平成23年度)においては、ネグリとハートの「帝国」三部作の最終巻にあたる『コモンウェルス』の翻訳について、監訳者としてその準備作業を進

めた。併せて、＜帝国論の新展開と情動論的転回＞という研究課題に対して、メディア理論の最新の成果をも取り入れつつアプローチした論文「ネットワーク文化の政治経済学」の作成に取り組んだ。また、同年9月22日から10月1日にかけて、イタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学を拠点に、＜3月11日以降の日本のメディア状況と第二次世界大戦後の核をめぐる諸種の争点/表象＞をテーマにしたシンポジウムにディスカッサントとして参加し、コメントと公開対話を行なうとともに、現地のクリエイティブ産業の調査を実施した。

(2) 二年度目にあたる平成24年度においては、ネグリとハートの『コモンウェルス』の日本語版を刊行するとともに(監訳および解説を担当、全2巻、NHK出版)同じく、ネグリとハートの新著『叛逆：マルチチュードの民主主義宣言』の日本語版を刊行した(共訳および解説を担当、NHK出版)。これらは帝国論の新展開と情動論的転回について研究するための開かれた土台をなすものである。また事典項目として、「ネグリ」・「ハート」・「マルチチュード」を始め、本研究とも関連する11個の項目を『現代社会学事典』(弘文堂)に寄稿した。

さらに、これらの研究と一部並行するかたちで、所属研究機関(大阪産業大学)の在外研究制度を活用し、平成24年9月から平成25年4月まで、アメリカ合衆国のハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所に客員研究員として所属しつつ、グローバルなメディア環境における情動のエコノミーに関する研究を進めた。その間、依田富子教授(Takashima Professor of Japanese Humanities)やアレクサンダー・ツァールテン助教授を中心とする研究会やワークショップに積極的に参加し、研究のネットワークを厚く広く構築することができた。ハ

ーヴァード大学を節点とする、この知的・人的なネットワークは、本研究にとってもきわめて有用な資源を供するものとなった。

(3) 前年度までに、研究課題にとっての基本文献にあたる翻訳図書3冊の出版と、半年以上にわたるハーヴァード大学での在外研究期間を完了したことを踏まえて、平成25年度には、図書(共著)1冊と雑誌論文(単著)2本を刊行するとともに、国内外のシンポジウムや研究会において発表者やディスカッサントの役割を積極的に引き受けた。

まず、グローバルなメディア文化の変容を多角的に分析した共同論集『ポストテレビジョン・スタディーズ』(せりか書房)の巻頭論文として、「ネットワーク文化の政治経済学：ポストメディア時代の共(コモン)のエコロジーに向けて」を発表した。これは、グローバルな制御社会と帝国の情動諸装置について分析しながら、ポストメディア時代における共(コモン)のエコロジーの可能性を探った論文である。また雑誌論文として、「そこに一緒に存在すること：ポストメディア時代の政治的情動と一般的感情」(『現代思想』、青土社)と、「転位しつつけるプロジェクトのために：スチュアート・ホールの闘いの遺産」(『思想』、岩波書店)を出版した。これらのうち前者は、ソーシャル・メディアを中心としたコミュニケーション資本主義における情動の流通・調整・捕獲のメカニズムを分析するとともに、2011年から2012年にかけて世界各地でバトンを引き継ぐかのように発生した一連の蜂起と占拠の運動を視野に入れつつ、ポストメディア時代の政治的情動とメディア・エコロジーとの連携の可能性を探究した論文であり、後者は、文化研究の主導者の一人であったスチュアート・ホールによる長年の闘いの理論的かつ実践

的な遺産継承のあり方について考察した追悼論考である。

併せて、さまざまなシンポジウムや研究会において、今日の政治的情動とソーシャル・ネットワークとの連関に焦点を当てた発表や報告を実行した——すなわち、多文化メディア市民研究会主催のトークセッション「情動と暴力、そして文化」にて招待講演「ポストメディア時代の政治的情動をめぐって」(東京藝術大学、平成25年6月)、同じく早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所主催のトークセッション「身体、暴力、文化を問いなおす」にて招待講演「<暴動の政治文化>と<新たな政治的情動>の可能性」(早稲田大学、同7月)を、また第3回複雑系科学シンポジウムにて発表「情動とソーシャル・メディア」(大阪大学、同9月)を続けて行なったあと、筑波大学人文社会系主催の招待講義「<帝国>時代のコモンとコミュニケーション」(筑波大学、同10月)を実施した。さらに、ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所主催の国際ワークショップ<Media Theory in Japan>における報告 Yuriko Furuhashi, “Arata Isozaki and Architecture’s impact on Media Theory” のディスカッションの役割も務めた(ハーヴァード大学、同11月)。

(4)最終年度にあたる平成26年度には、研究のまとめに向けて注力しつつ、図書(共著)2冊と雑誌論文1本を刊行した。まず、『産研叢書38 プロジェクト研究<福祉・人権概念の転回と歴史認識の転換>』(大阪産業大学産業研究所)の第2章として「帝国」とソーシャル・メディア時代の政治的情動」を執筆したが、これは前年度に発表した「そこに一緒に存在すること：ポストメディア時代の政治的情動と一般的感情」(『現代思想』、青土社)を増補したものである。また、『よくわかるメディア・ス

タディーズ 第2版』(ミネルヴァ書房)に「ネットワーク社会の政治経済学」と「ソーシャル・メディアによるランキング機能」の項目を、『よくわかる社会情報学』(ミネルヴァ書房)に「情報資本主義」の項目を執筆した。

これらは研究課題「帝国論の新展開と情動論的展開」のまとめにあたる図書(共著)といえるが、さらにこの研究課題を引き継ぎ、またそれを新たな方向へと発展させていくための試みとして、論文「加速と隷属：機械状資本論ノート」(『現代思想』、青土社)を出版した。また同種の試みとして、デジタル・メディア時代の政治的公共性とナショナリズム(DMN)研究会[日本学術振興会科学研究費補助金基盤(B)]主催の公開シンポジウムにおいて、報告「制御と隷属：<現代の政治的公共空間を捉え返すあらたな視点>のための作業ノート」を行なった(大阪産業大学・梅田サテライトキャンパス、平成26年10月)。併せて、平成27年1月27日より2月4日までドイツ・ベルリン市に滞在し、「世界文化の家」で開催されていた Transmediale/festival 2015 に参加し、世界中から集まった気鋭のメディア研究者たちと対話を繰り返しながら、「コミュニケーション資本主義」(ジョディ・ディーン)による情動の捕獲のメカニズムの解析と、「帝国論の新展開と情動論的転回」をテーマとする本研究の成果を拡大・深化させることに取り組んだ。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

水嶋一憲「加速と隷属：機械状資本論ノート」、『現代思想』第43巻第10号、青土社、2015、172-185頁、査読無

水嶋一憲「転位しつづけるプロジェクトのために：スチュアート・ホルの闘いの遺産」、『思想』No.1081、岩波書店、2014、61-65頁、査読無

水嶋一憲「そこに一緒に存在すること：ポストメディア時代の政治的情動と一般的感情」、『現代思想』第41巻第9号、青土社、2013、156-169頁、査読無

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計8件)

水嶋一憲「情報資本主義」西垣通・伊藤守編著『よくわかる社会情報学』、ミネルヴァ書房、2015、150-151頁(総217頁)

水嶋一憲「ネットワーク社会の政治経済学：研究の方法4」、『ソーシャル・メディアによるランキング機能』、伊藤守編著『よくわかるメディア・スタディーズ 第2版』、ミネルヴァ書房、2015、52-54頁と74-75頁(総231頁)

水嶋一憲「帝国とソーシャル・メディア時代の政治的情動」、『産研叢書38 プロジェクト共同研究<福祉・人権概念の転回と歴史認識の転換>』、大阪産業大学産業研究所、2015、25-49頁(総130頁)

水嶋一憲「ネットワーク文化の政治経済学：ポストメディア時代の共(コモン)のエコロジーに向けて」、『伊藤守、毛利嘉孝編『アフター・テレビジョン・スタディーズ』、せりか書房、2014、18-41頁(総330頁)

水嶋一憲(訳および解説)、アントニオ・ネグリ+マイケル・ハート『叛逆：マルチチュードの民主主義宣言』、NHK出版、2013、総213頁(清水知子との共訳、水嶋一憲「解説 これはマニフェストではない：宣言から構成へ」、201-213頁)

水嶋一憲(監訳および解説)、幾島幸子・古賀祥子(訳)、アントニオ・ネグリ+マイケル・ハート『コモンウェルス(下)』、NHK出版、2012、総338頁(水嶋一憲「解説 共の革命論」、293-308頁)

水嶋一憲(監訳)、幾島幸子・古賀祥子(訳)、アントニオ・ネグリ+マイケル・ハート『コモンウェルス(上)』、NHK出版、2012、総348頁

水嶋一憲「ネグリ」、『ハート, M』、『バリバール, E』、『マルチチュード』等11項目、吉見俊哉ほか監修『現代社会学事典』、弘文堂、2012、総1648頁

〔その他〕

国内シンポジウムでの発表

水嶋一憲「情動とソーシャル・メディア」、『第3回複雑系科学シンポジウムにおける発表、大阪大学、2013年9月23日

国際シンポジウムにおけるディスカッションとしてのコメント

Kazunori MIZUSHIMA, "A comment for Yuriko Furuhata's article <Arata Isozaki and Architecture's Impact on

Media Theory: From Cybernetics to Media Environment in the 1960s and 1970s>” (ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所主催の国際シンポジウム <Media Theory in Japan 1920s-2000s>におけるディスカッションとしてのコメント、2013年11月15日)

水嶋一憲、マルチェッラ・マリオッティ、トシオ・ミヤケ「3月11日以降の日本のメディア状況と第二次世界大戦後の核をめぐる諸種の争点/表象」をテーマにした対話と、Kazunori MIZUSHIMA, “A comment for Toshio Miyake’s article <Manga, anime, pop-art: from Hiroshima/Magasaki to Fulushima>” (イタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で2011年9月23日に開かれた *European Researchers’ Night* における公開対話とコメント)

研究会での報告

水嶋一憲「制御と隷属：＜現代の政治的公共空間を捉え返すあらたな視点＞のための作業ノート」、「デジタル・メディア時代の政治的公共性とナショナリズム研究会」[日本学術振興会科学研究費補助金基盤(B)]主催の公開研究会における報告、2014年10月11日、大阪産業大学・梅田サテライトキャンパス

水嶋一憲「＜帝国＞時代のコモンとコミュニケーション」、筑波大学人文社会科学系主催の招待講義、2013年10月30日、筑波大学

水嶋一憲「＜暴動の政治文化＞と＜新たな政治的情動＞の可能性」、早稲田大学メディア・シティズンシップ研究

所主催のトークセッション「身体、暴力、文化を問いなおす」における招待講演、2013年7月12日、早稲田大学
水嶋一憲「ポストメディア時代の政治的情動をめぐる」、多文化メディア市民研究会主催の公開研究会「情動と暴力、そして文化」における招待講演、2013年6月15日、東京藝術大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水嶋 一憲 (MIZUSHIMA KAZUNORI)
大阪産業大学・経済学部・教授
研究者番号：20319578